



旧本多町校舎時代の巖想碑（大正15年）

# 一泉

発行所  
〒921 金沢市泉野出町  
3丁目10-10  
金沢泉丘高等学校内  
一泉同窓会  
電話(0762)42-0211



山本外吉  
(泉丘初代校長  
現金沢経済大学長)

「一泉」に一筆をとの依頼状が舞い込んできた。物を書くのが億劫なこの頃ではあるが一泉同窓会からとあつては、お断りするのには非礼であろう。ジョンソン旋風の余波を受けて泉丘へ転補されたのは、私には寝耳に水であった。これには大変というのが偽らざる実感で、身心ともに困憊していた私には、泉野は余りにも遠い道のりであった。でも縁あって、その道をとうとう十三年間も通うことになった。とかく楽しいことは忘れ易く、悔まれること、苦しいことのみ多かりきであった。犇き合う思い出の中から選ぶとすれば、矢張り一泉同窓会誕生時のこぼれ話ということにならうか。

会が正式に発足したのが三十年二月とあるから、その前年の晩秋だったかと思う。一泉同窓会から話し合いたいとの申し出がもたらされたのは、

席は仙宝閣で出席は当時の会長で公安委員長をしておられたかと思う外科の田中清次さん、その後会長として長いお付き合いをして頂くことになった英安吉さん、それに剣道の吉野勝太郎先生。お三方とも故人になられて淋しいことだが、外に四井謙次さんが同席され、こちらは私一人で錚々たる先輩を前にして、圧倒される感がなくもなかった。勿論、話題は同窓会合併の件であった。学制改革で後継ぎの後輩を失った同窓の淋しさは、私にも痛いほど分かるのであったが私一人で引き受けられ

ることでもなく、ご不満だったと思うが即答を避け引き下つたのである。今の人には理解し悪いと思うが、当時は米軍の占領下で、日本人の心まで改造するのが彼等の意図であり、過去との断絶が世間一般の合言葉にもなっていた。

仮入学式に柴野知事が臨場して「一中は自分の母校だが、泉丘は新しい歴史を作る学校で一中の延長ではない」と力説されたのが今だに耳に残っている。またあの巖霜碑を幽囚の大地から掘り出し再建

するにも県は関知せず同窓会が敷地の借用願を学校側に呈出するという手続きを踏まねばならない時期であった。

仙宝閣での会見後学校側では評議員会を開いて意見を聞いたが全員が合併に賛成で異議がなかった。又在校生たちが部の先輩として一中卒業生より援助を受けているという既成事実もあり同窓会の合併が一番自然な成行きだと断定された。残るは若い泉丘同窓会員の同意を得ることであり学校で役員会を開いて賛成を求めたが思わぬ反対に遭遇した。彼等には戦争中の暗い思い出があり大人一般への不信感もあつたろう。私共は合併の利害得失を説いた。伝統の重みや意義についても論じた。論議は延々夜半に及んだ、でも最後に彼等は譲歩してくれた。こちらの粘りに根負けしたので気の毒でもあった。今は記憶もおぼろな遠い昔話で一泉同窓会と相携えての学校のその後の大きな飛躍が総てを懐しい思い出に変えたのである。

## 「一泉」第二号によせて

### 掘み植えの銀杏



垣田 生 知  
(二四四十七回卒)

校庭に銀杏の木のある学校は珍らしくありません。でも本校の運動場に立って見廻すと、図書館の前庭にある五本と、運動部室の前に並んだ四本の銀杏はいずれも根本の所で三ないしは五本に幹分かれした風変りな銀杏であることに気づくでしょう。

昭和十四年、私達が本多町の旧一中校舎からこの校舎(当時の新校舎)に移転してから二年目の秋、卒業を翌春に控えた私達五年生は、卒業記念樹として各自が一本づつ何がしかの木を植えるよう学校側から要望されていきました。ある晴れた日曜日、当時仲のよかつたK君と共に木を植えに行こうと家を出ました。途中犀川大橋の下手にあった植木屋さんに寄って、私は高さ五十七センチほどの杉の苗木を一本、彼は二十センチほどの割箸みたいな銀杏の苗木五十本を買いました。五十本も買ったのはそれが苗箱に一まとめになつており

バラ売りはできないと言われたからにすぎません。共に金一円を払つたことを覚えています。

さて学校について、校舎北側の非常階段近くの記念樹作り植え場に、私は杉の木を植え、ものぐさな彼は五十本の銀杏を一本づつ植える手間ははぶいて、五本づつの十束にわけて掘み植えをしました。

昭和十五年春私達は一中を卒業し、私はその後昭和二十三年夏から母校の教壇に立つことになりました。七年の歳月の間に記念樹はそれぞれ校庭のふさわしい場所に移植され、彼の束ね植えの銀杏は旧柔、剣道場、銃器庫にそつた場所にきちんと十組、高さも人の背丈を越えて青葉を繁らせていきました。私はそれから更に二、十三年の長期にわたつて、一高、泉丘と校名は変わつても同じ校舎で教鞭をとる幸運に恵まれましたが、その間、図書館の新設に当つて前庭を飾る木としてこの銀杏五組が選ばれ、残りも後年運動部室の建築と共にその前に移し植えられました。

そのK君も今から十年ほど前病没しました。しかし彼の遺した束ね植えの銀杏群は、老朽したこの校舎が取りこわされ四年後には再建される新校舎のキャンパスをも飾りつづけることでしょう。在りし日の掌の温みをそれ

ぞれの木肌にとどめて。彼は幸せ者かもしれませぬ。私の植えた杉の木はどこでどうなつたか未だに不明なのですから。

(泉丘高校教頭)

### 通信制課程の現況



中 本 文 雄

戦後三十年有余、激動する社会の中にあつて、泉丘高校通信制課程は、今日まで勤労青少年にとつての中心的な教育機関として、その使命を十分に果してきた。今こゝに歴史を顧りみると、昭和二十三年二月十日に県立金沢第一中学校に、通信制教育高等部を付設し翌年二月二十七日に開校式を行う。三十三年三月十日、第一回卒業式を行い以来本年度第二十三回までの卒業生は、一〇七三名に達し、一泉同窓会の一員として活躍している。

三十八年四月十四日、NHK学園高等学校協力校となり現在一三四名の卒業生を出している。尚一昨年より一部科目履修生を募集し毎年二十余名の単位修得者が送り出されている。通信教育は、自らが学びたいから、自ら求め、そして自分のものに

するものであり、本当の意味の教育を求めている制度である。何時でもどこでも、誰れでも、学べる教育こそ真の教育であり、通信制の特色でもある。

本県における全日制への進学率が、九十七、四パーセントに達している中で、高等学校が国民の大多数の子弟を教育する国民的教育機関となつた現在、通信制教育も様々な課題を抱えるに至り、大きな変革を迫られている。通信制教育のおかれている位置や、姿をとらえ、通信制教育の基本を踏まえつゝ、生涯教育の観点から後期中等教育全体の中でその在り方を考え直さねばならないように思われる。

高度経済成長が生み出したといわれる人間疎外のひずみの反省と、人間性の回復が強く望まれている中で通信制課程の教育が、生徒一人一人の個性の伸張を図り、豊かな人間形成を目指して着実に歩を進めることが、明日への教育のためぜひ必要なことである。

今後、同窓生諸兄のご協力とご指導を切にお願いし、通信制の現況をお知らせいたします。

(泉丘高校通信課教頭)

